

地方国立A大学の学生におけるインターンシップと就職活動の関係 —2021年10月の全学アンケート調査の結果から—

原 瑞 穂

- I はじめに
 - II 調査の目的
 - III 調査の方法
 - IV 結果
 - V 考察
 - VI おわりに
- 謝辞
参考文献

キーワード 大学 インターンシップ 就職活動 効果

I はじめに

(1) 近年のインターンシップ

我が国の産業構造は少子高齢化やIT時代の進展に伴い、急激な変化を遂げてきたが、ここ最近の新型コロナウイルス感染拡大により益々そのスピードは増していると言われている。新型コロナウイルス感染拡大の影響は、大学生のインターンシップや就職活動にも及び、会社説明会や面接などもオンラインに置き換えられ、就職活動の最初から最終面接までオンライン対応のまま終わる企業も少なくない。こうした就職活動を経て内定を獲得した学生の中には、企業に実際に足を運ぶことなく就職活動を終える者も多く、働くことへの具体的なイメージができないままに就職する学生が増えることが懸念されている。

インターンシップにおいても多くがオンライン化された。学生は、自宅のパソコンから参加することを余儀なくされ、現場での体験的な活動が少なくなり、企業の現状把握もままならない状況にある。近年増加傾向にあるインターンシップであるが、短期体験型のものが増え、教育目的を強調する国の方針とは乖離するものが目立つようになってきた。インターンシップが採用活動に直結するという意識が企業側にも学生側にも強まりつつある。十分な準備をせずに気軽にインターンシップに参加してしまう学生の中には、実力を発揮できずに就職活動を終えることも予想される。

文部科学省は「インターンシップ推進に当たっての基本的考え方」(文部科学省, 1997) で、①キャリア教育・専門教育、②教育内容・方法の改善・充実、③高い職業意識の育成、④自主性・独創性のある人材の育成の4つを学生にとってのインターンシップの意義として挙げている。学生にとってキャリア教育、専門教育であるインターンシップが、高い職業意識の育成に至ることなく採用に直結するものにすり替わりつつあるのではないか、インターンシップの内容や方法の改善や充実に関する調査や試みの具体化

鍛えあげインターンシップ

平成23年から実施されているインターンシップであり、インターンシップコーディネーターが企業と学生の間に入り、実習プログラムの調整や振り返りを行うことで、学生が職場の見学や体験から一歩踏み込み、これまでの自分から「一皮むける」経験を目指すインターンシップである。参加前の準備講座、受入企業との事前交流会を実施し、終了後はインターンシップコーディネーターが振り返り面談を実施する。所属学部において2単位付与するが、単位認定をしていない学部もある（図1参照）。

実践型インターンシップ

平成18年度より本格的に始まった長期の課題解決型インターンシップである。企業で実際に問題となっている課題に対して、参加する学生が大学で学んだ知識を活用し、担当教員のサポートを得ながら企業と一緒に問題解決を行うものであり、2週間～数ヶ月程度受け入れ企業で問題解決に取り組む（図1参照）。

学部独自インターンシップ

各学部において独自実施しているもの及び学生が直接受入企業・機関に応募するものである。

地域インターンシップ

全学共通科目（主題科目・前期）において実施しているものである。

その他インターンシップ

その他、キャリア支援センター経由やキャンパスウェブ（民間のインターンシップ紹介会社）などによるものである。

（3）大学経由インターンシップの参加状況

令和2年度の大学経由インターンシップ参加者を調べた。

参加者は、単位を取得した者201名と取得しなかった者127名、不明73名を合計した401名であった。受け入れ先企業は、県内が275社、県外が125社、不明が1社であった。性別では、男性が191名、女性が202名であった。所属では、経済学部が最も多く161名であった。次いで、創造工学部66名、法学部62名、農学部39名、工学研究科博士前期課程が33名、教育学部18名、農学研究科11名、医学部8名、工学部3名であった。学年では、3年生が291名で最も多く、次いで1年生が77名、2年生が19名、4年生が14名であった。参加日数は、5日間で159名で最も多く、2日間74名、10日間28名、3日間22名、4日間11名であった。

参加したインターンシップの種別では、体験型インターンシップが86名、鍛え上げインターンシップが29名、地域インターンシップが29名であった。実践型インターンシップが29名、学部独自、学生独自開拓インターンシップが170名であり、その他、キャリア経由22名、キャンパスウェブ7名であった。

これらの結果から、学生は県内県外に関わらず多くの企業のインターンシップに積極的に参加しており、単位取得が目的でない者も多かった。特に、学部では経済学部、学年では3年生、期間では5日間の期間のインターンシップが多く、学部や学生が独自開拓するインターンシップに多く参加していた。また、受け入れ先事業所は177事業所あり、学生のインターンシップへの理解と協力が多く得られていることが示唆された。以上の内訳を表1に示す。

表1 令和2年度のインターンシップの参加者と受け入れ企業の内訳

内容		人数	%	内容		人数	%
出身	県内	275	68.6	日数	2日～4日	107	26.7
	県外	125	31.2		5日	159	39.7
	不明	1	0.2		6日～9日	21	5.2
単位	単位有	201	50.1	10日	28	7.0	
	単位無	127	31.7	14日	1	0.2	
	不明	73	18.2	15日	1	0.2	
性別	男	191	47.6	60日	1	0.2	
	女	202	50.4	その他	6	1.5	
学部	教育学部	18	4.5	不明	77	19.2	
	法学部	62	15.5	種別	体験型インターンシップ	96	23.9
	経済学部	161	40.1	鍛え上げインターンシップ	29	7.2	
	医学部	8	2.0	地域インターンシップ	29	7.2	
	農学部	39	9.7	実践型	48	12.0	
	創造工学部	66	16.5	学部独自、学生独自開拓	170	42.4	
	工学部	3	0.7	キャリア経由	22	5.5	
	工学研究科博士前期課程	33	8.2	キャンパスウェブ	7	1.7	
	農学研究科	11	2.7	受入れ先	体験型インターンシップ30社	96	23.9
学年	1年	77	19.2	企業177社	鍛え上げインターンシップ9社	29	7.2
	2年	19	4.7	地域インターンシップ6社	29	7.2	
	3年	291	72.6	実践型5社	48	12.0	
	4年	14	3.5	学部独自、学生独自開拓116社	170	42.4	
				キャリア経由9社	22	5.5	
			キャンパスウェブ2社	7	1.7		
						401	100.0

II 調査の目的

本学における大学経由のインターンシップは、キャリア教育の一部に位置付けられるとともに、地域の産業界との連携で行われている。しかし、令和2年度インターンシップの参加総数は401名の内、大学経由に関しては240人であり、相対的に多いとは言えない。この傾向は、文部科学省（2017）が「昨今におけるインターンシップについては、後述するとおり、大学等において単位認定を行うインターンシップへの学生参加率が国際的に見ても特に低いなど、量的な拡大が課題となっていると同時に、事前・事後学習が実施されず教育的効果が十分でないなど、質的な充実についても課題として挙げられている。」と報告しているように、本学だけでなく全国的なものである。これらの現状と報告を受けて、本学の学生が経験するインターンシップについても、量的な拡大と質的な充実を図るために、本学のインターンシップの現状を把握することが必要である。

そこで、本調査は、就職活動対象学年の学生を対象にして、インターンシップ（大学経由と個人開拓型など全てを含む）への参加状況、学生の反応、内定状況との関係などについて検証することで、本学における今後のインターンシップのあり方について検討を行うことを目的とした。

Ⅲ 調査の方法

(1) 調査時期

2021年10月（10月12日から10月23日の12日間）。

(2) 調査協力者

インターンシップと就職活動を経験した学生の傾向を調べるため、学部4年生、修士2年生を協力者とした。

(3) 調査方法

学生の就職状況などを調べるために、インターンシップと就職活動を経験した学年である、4年生修士2生を対象として全学アンケート調査を実施した。アンケートは、Google Formで作成した内容をオンラインで配布し、URLから回答する形式で行った。

(4) 調査内容

調査内容は、属性（所属、性別、年齢、学年、出身県）、就職活動状況、インターンシップ関係、キャリア支援センターに対する意識であった。本調査では、キャリア支援センターに対する意識の分析の報告は取り扱わない。

(5) 倫理的配慮

倫理的配慮として、本調査は、本学の学生に対してインターネットを媒体として実施された。アンケートには、自由回答と個人情報の取り扱いについて説明を加えた。

Ⅳ 結果

(1) 属性

回答数は412名であった。重複者を除く410名を分析対象とした。学部では創造工学部が最も多く89名であった。次いで、経済学部80名、法学部69名、教育学部64名、農学部44名、工学研究科42名、農学研究科18名と多かった。性別では男性が217名、女性が190名、その他が3名であった。年齢は22歳が177名で最も多く、次いで21歳が128名であった。学年は4年生が338名で最も多く、次いで修士2年生が69名であった。出身地の内訳は岡山県が最も多く111名であった。次いで香川県が107名、愛媛県が36名、兵庫県が30名、徳島県が25名、京都府が14名、高知県が13名であった。結果を表2に示す。

(2) 就職活動状況

①卒業後の進路

卒業後の進路の予定は、2021年10月の時点で、回答者410名の内353名（86.1%）が就職予定であり、39名（9.5%）が進学予定、12名（2.9%）が未定、6名（1.5%）がその他であった。（図2）。

②現在の就職活動状況（2021年10月時点）

2021年10時点の学部4年生と修士2年生の就職活動状況を聞いた。

その結果、「内定先があり、就職活動を終了している」と答えた者は、322名で全体の78.5%（教育学部

48名、法学部54名、経済学部68名、創造工学部65名、農学部32名、工学研究科38名、農学研究科16名、地域マネジメント研究科1名)、「内定は得ているが、就職活動を継続している」と答えた者は、11名で全体の2.7% (教育学部1名、法学部5名、介在学部3名、創造工学部1名、農学部1名)、「内定先はなく、現在も就職活動中である」と答えた者は、22名で全体の5.4% (教育学部7名、法学部4名、経済学部7名、創造工学部1名、農学部1名、工学研究科1名、農学研究科1名)、「就職活動をしなければならないが、していない」と答えた者は、2名で全体の0.5% (創造工学部1名、工学研究科1名)、「これから就職活動を始める」と答えた者は、1名で全体の0.2% (農学研究科1名)、「進学する」と答えた者は、39名で全体の9.5% (教育学部4名、法学部2名、経済学部1名、創造工学部20名、農学部10名、工学研究科2名)、「その他」と答えた者は、13名で全体の3.2% (教育学部4名、法学部4名、経済学部1名、創造工学部1名、教育学研究科1名、地域マネジメント研究科2名)であった(表3)。

アンケート調査の回答の内、「内定があり、就職活動を終了している」者が多かったが、「内定は得ているが、就職活動を継続している」「内定先はなく、現在も就職活動中である」「就職活動をしなければならないが、していない」「これから就職活動を始める」という者を合わせると36名であり、全体の8.9%であった。また、「その他」を選択した者のうち、教育学部や法学部などは、公務員や教育関係を志望しているために、就職活動を継続せざるを得ない状況に置かれている可能性がある。これらの結果から、回答者全体の約1割以上の学生が、10月の時点で就職活動に何らかの問題や困難を抱えている可能性があると推察される。

表2 回答者の内訳

		N	%			N	%			N	%	
所属	教育学部	64	15.6	学年	4年生	338	75.1	出身県	京都府	14	3.4	
	法学部	69	16.8		5年生	1	0.2		滋賀県	2	0.5	
	経済学部	80	19.5		修士2年生	69	15.3		奈良県	2	0.5	
	創造工学部	89	21.7		修士3年	1	0.2		大阪府	6	1.5	
	農学部	44	10.7		前期末卒業	1	0.2		兵庫県	30	7.3	
	教育学研究家	1	0.2		出身県	北海道	2		0.5	鳥取県	6	1.5
	工学研究科	42	10.2			秋田県	1		0.2	島根県	7	1.7
	農学研究科	18	4.4			茨城県	1		0.2	山口県	5	1.2
	地域マネジメント研究科	3	0.7			栃木県	1		0.2	広島県	10	2.4
性別	男性	217	52.9	群馬県		3	0.7	岡山県	111	27.1		
	女性	190	46.3	埼玉県		1	0.2	香川県	107	26.1		
	その他	3	0.7	千葉県		1	0.2	愛媛県	36	8.8		
年齢	21歳	128	31.2	東京都		1	0.2	徳島県	25	6.1		
	22歳	171	41.7	神奈川県	1	0.2	高知県	13	3.2			
	23歳	49	12.0	静岡県	2	0.5	福岡県	3	0.7			
	24歳	47	11.5	長野県	1	0.2	長崎県	4	1.0			
	25歳	10	2.4	岐阜県	1	0.2	宮崎県	1	0.2			
	26歳	2	0.5	石川県	1	0.2	大分県	1	0.2			
	28歳	1	0.2	福井県	1	0.2	熊本県	1	0.2			
	35歳	1	0.2	三重県	1	0.2	沖縄県	1	0.2			
	46歳	1	0.2	和歌山県	1	0.2						
										410	100.0	



図2 卒業後の進路の予定 (2021年10月時点)

表3 現在の就職活動状況 (2021年10月時点、410名)

	教育学部	法学部	経済学部	創造工学部	農学部	教育学研究科	工学研究科	農学研究科	地域マネジメント研究科	合計	%
1 内定先があり、就職活動終了している	48	54	68	65	32	0	38	16	1	322	78.5%
2 内定は得ているが、就職活動を継続している	1	5	3	1	1	0	0	0	0	11	2.7%
3 内定先はなく、現在も就職活動中である	7	4	7	1	1	0	1	1	0	22	5.4%
4 就職活動をしなければならないが、していない	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2	0.5%
5 これから就職活動を始める	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.2%
6 進学する	4	2	1	20	10	0	2	0	0	39	9.5%
7 その他	4	4	1	1	0	1	0	0	2	13	3.2%
合計	64	69	80	89	44	1	42	18	3	410	100.0%

③就職先が決まっている人の就職先

就職先が決まっている学生の内訳は、民間企業が235名、公務員が70名、教員が27名、その他が6名、進学が40名、未定が31名であった。学部では、公務員は法学部が多く、民間企業は経済学部と創造工学部が多かった。教育学部は、教員が最も多かったが、民間希望者も17名、公務員6名であり、半数近くが教員以外の就職先であった。また、この時点での未内定学生が31名おり、回答者の7.6%であった。これらの学生については支援の必要がある(表4)。

表4 現時点での就職決定先の内訳 (2021年10月)

	教育学部	法学部	経済学部	創造工学部	農学部	工学研究科	農学研究科	地域マネジメント研究科	合計	%
公務員	6	38	15	6	5	0	0	0	70	17.1%
民間	17	19	56	59	27	38	16	3	235	57.5%
教員	26	0	0	0	1	0	0	0	27	6.6%
その他	1	2	1	1	0	0	1	0	6	1.5%
進学	4	2	2	20	10	2	0	0	40	9.8%
未定	10	8	6	3	1	2	1	0	31	7.6%
合計	64	69	80	89	44	42	18	3	409	100.0%

※表3の内容と異なる数値があるが、学生回答によるものである。

④本年3月時点での就職希望先と現時点での就職予定先

2020年3月時点での就職希望先と現時点（2021年10月）の就職予定先を比較した。公民併願が希望29名から現時点75名へ、民教併願が希望11名から現時点30名へ、公務専願が希望68名から現時点4名へ、教員専願が希望35名から現時点2名へ、進学が希望35名から現時点37名へ、その他が希望6名から現時点14名へと変化した（表5）。当初は教育や公務員を専願していても、現実的には民間との併願をせざるを得ない状況になっていることが考えられる。民間との併願は、スケジュール的にもハードになることから、効率的に活動するためにはキャリア支援センターなどの支援を利用することが望ましいであろう。

表5 2020年3月時点でも就職希望先と現時点（2021年10月）の就職予定先

	教育学部		法学部		経済学部		創造工学部		農学部		教育学研究科		工学研究科		農学研究科		地域マネジメント研究科		合計	
	希望	現在	希望	現在	希望	現在	希望	現在	希望	現在	希望	現在	希望	現在	希望	現在	希望	現在	希望	現在
民間	15	18	14	21	58	60	64	63	25	28	0	0	38	39	17	17	3	2	234	248
民公併願	0	8	7	40	9	16	3	6	8	5	0	0	2	0	0	0	0	0	29	75
民教併願	11	28	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	11	30
公務専願	9	1	43	2	12	1	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	68	4
教員専願	26	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	27	2
進学	2	4	3	2	0	0	18	19	10	10	0	0	2	2	0	0	0	0	35	37
その他	1	3	2	4	1	3	1	1	0	0	0	0	0	1	1	1	0	1	6	14
合計	64	64	69	69	80	80	89	89	44	44	1	1	42	42	18	18	3	3	410	410

※「希望」は昨年3月時点での希望

(3) インターンシップについて

①インターンシップへの参加不参加

インターンシップに参加した学生は244名（59.5%）、参加していない学生は166名（40.5%）であった（表6）。回答者の60%程度が何らかのインターンシップを経験していることが示された。学部では、経済学部、創造工学部、農学部関係の参加者が多く、教育学部は少なかった。

表6 インターンシップへの参加状況

	教育学部	法学部	経済学部	創造工学部	農学部	教育学研究科	工学研究科	農学研究科	地域マネジメント研究科	合計	%
参加した	12	36	60	56	28	0	37	14	1	244	59.5%
参加していない	52	33	20	33	16	1	5	4	2	166	40.5%
合計	64	69	80	89	44	1	42	18	3	410	100.0%

②参加したインターンシップの種類

参加したインターンシップの種類は、個人開拓型が最も多く169名（70.1%）、体験型57名（23.7%）、鍛え上げ12名（5.0%）、実践型3（1.2%）名であった（表7）。単位取得に無関係な個人開拓型に7割の者が参加していた。学生は、単位取得より自身の関心のある企業に自由に参加したい気持ちが強いと考えられる。

表7 参加したインターンシップの種類

	教育学部	法学部	経済学部	創造工学部	農学部	工学研究科	農学研究科	地域マネジメント研究科	合計	%
体験型	0	11	22	11	9	3	1		57	23.7%
鍛え上げ	0	4	3	3	2	0	0	0	12	5.0%
実践型	0	0	0	1	1	1	0	0	3	1.2%
個人開拓	12	20	34	40	16	33	13	1	169	70.1%
	12	35	59	55	28	37	14	1	241	100.0%

③参加したインターンシップの日数

参加したインターンシップの日数は、5日以上が96名（39.2%）、1日が95名（38.8%）、2日が24名（9.8%）、3日が19名（7.8%）、4日が11名（4.5%）であった（表8）。概ね6割の者は短期のインターンシップに参加していた。前述の参加したインターンシップの種類を合わせて見ると、個人開拓型の中にも単位を取得できるものに参加している可能性があることが考えられる。

表8 インターンシップ参加日数

	教育学部	法学部	経済学部	創造工学部	農学部	工学研究科	農学研究科	地域マネジメント研究科	合計	%
1日	10	10	20	23	14	10	9	0	96	39.2%
2日	2	2	6	7	2	4	1	0	24	9.8%
3日	0	2	2	3	1	9	1	1	19	7.8%
4日	0	2	2	5	0	2	0	0	11	4.5%
5日以上	0	20	31	18	11	12	3	0	95	38.8%
合計	12	36	61	56	28	37	14	1	245	100.0%

④インターンシップに参加した企業への応募

インターンシップに参加した企業に「応募した」は178名（48.0%）、「応募しなかった」は178名（48.0%）、「同業種に応募した」は14（3.8%）名、「その他」が1名（0.3%）であった（表9）。インターンシップに参加した企業へは、参加者の半数近くが就職活動の際に応募していることが示された。また、同業種に応募した者14名を合わせると、希望している企業や業界に応募した学生が192名（51.8%）であり、半数を超えていた。逆に、インターンシップ企業に応募しなかった者も応募した者と同数いた。

株式会社ディスコキャリアスリサーチ「キャリアス就活2022学生モニターインターンシップ特別調査レポート（2021年4月発行）」によると、インターンシップの参加前後で、その企業への就職志望度がどう変化したかを調べた結果、就職志望度が参加前の25.2%から、参加後は45.0%へと約20ポイント増えており、プログラムを通じて企業や仕事内容への理解を深めたことで、就職先として意識したり、志望度合いを高めたりする学生が少なくないこと、インターンシップに参加することで志望企業や志望業界になった割合は49.6%に上ったことを報告している（図3）。

表9 インターンシップ企業への応募の有無

	教育学部	法学部	経済学部	創造工学部	農学部	教育学研究科	工学研究科	農学研究科	地域マネジメント研究科	合計	%
応募した	7	23	46	39	18	0	34	11	0	178	48.0%
応募しなかった	40	35	31	37	22	0	5	7	1	178	48.0%
同業種に応募した	1	2	3	6	1	0	1	0	0	14	3.8%
その他	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.3%
合計	48	60	80	83	41	0	40	18	1	371	100.0%

※回答数が371名と多かったのは、複数の参加企業への回答が混在しているためと考えられる。

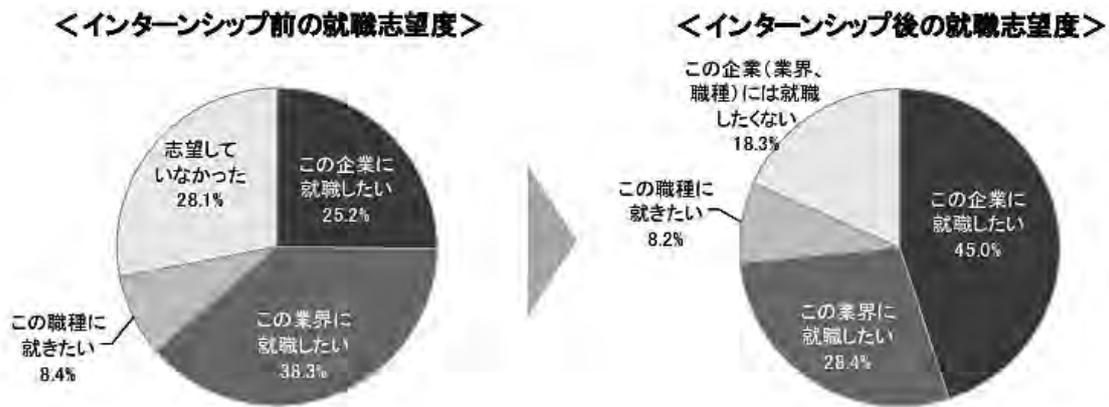


図3 インターンシップ参加前後の就職志望度の変化（株式会社ディスコキャリアタスリサーチより）

この報告と比較しても、本学の学生のインターンシップ先企業への応募が半数程度であるのは少ないのではないかと考えられる。教育学部や法学部は教員や公務員との併願のために参加企業への応募を控える可能性は考えられるが、経済学部、創造工学部、農学部などの参加者については応募しなかった理由が、参加前の企業研究不足や職業レディネスの不足という学生に起因するものなのか、受け入れ先企業のプログラム内容に起因するものなのか、検証する必要がある。

⑤インターンシップに参加した企業からの内定

インターンシップに参加した企業から「内定をもらった」が114名（29.8%）、「内定はもらっていない」が84名（21.9%）、「応募しなかった」が182名（47.5%）、「その他」が3名（0.8%）であった（表10）。「内定をもらった」「内定はもらっていない」を加えると198名（51.7%）であり、半数以上の学生がインターンシップに参加した企業に応募していると推察される。「応募しなかった」人数も半数近くであり、これは前述の結果とほぼ同程度であり、インターンシップの効果との関係も検証する必要がある。

「マイナビ2022年卒学生就職モニター調査7月の活動状況」によると、入社予定先の企業のインターンシップに参加した割合は、2022年卒の学生の7月の情報では、44.2%（前年比5.1pt減）であった。前年より減少したとはいえ、入社した者の内、その企業のインターンシップに参加した学生が4割を超えることになる。インターンシップの参加の有無が採用に影響する傾向が強いことがわかる（図4）。

表10 インターンシップに参加した企業からの内定

	教育学部	法学部	経済学部	創造工学部	農学部	教育学研究科	工学研究科	農学研究科	地域マネジメント研究科	合計	%
内定をもらった	4	16	28	28	8	0	23	7	0	114	29.8%
内定はもらっていない	8	9	25	13	12	0	13	4	0	84	21.9%
応募しなかった	42	36	27	43	20	0	4	7	3	182	47.5%
その他	1	0	0	1	0	1	0	0	0	3	0.8%
合計	55	61	80	85	40	1	40	18	3	383	100.0%

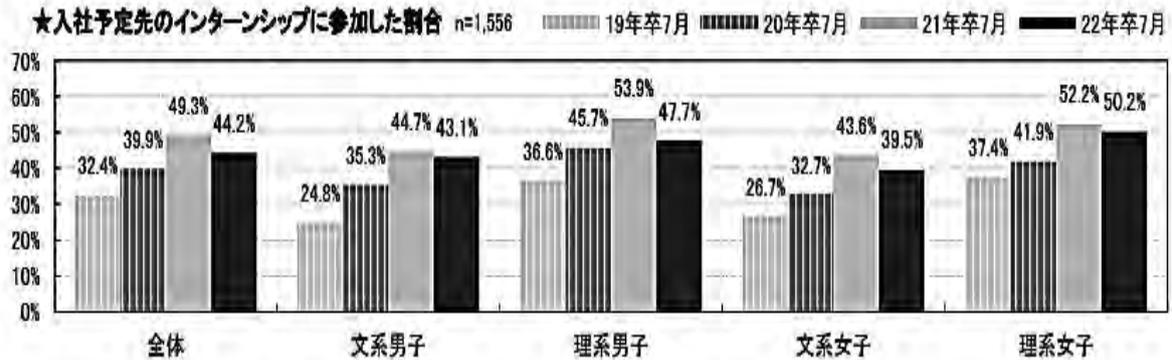


図4 マイナビ2022年卒学生就職モニター調査7月の活動状況より

⑥インターンシップの種類別の内定状況

インターンシップの種類と内定の獲得状況について述べる。「内定をもらった」学生は、鍛え上げインターンシップ参加者が最も多く58.3%であった。次いで個人開拓型インターンシップ参加者が50.8%であった。単位取得型インターンシップの中でも事前事後の参加や作業の多い鍛え上げを選択する学生は就職活動への熱意があると考えられ、個人で開拓してまでも参加しようとする者も同じ傾向があると考えられる。

「内定はもらっていない」学生は、個人開拓型インターンシップ参加者が32.0%で最も多く、次いで体験型インターンシップ参加者が28.1%と多かった。積極的な者の中でも内定獲得に至らない者もあり、参加目的や態度に差がある可能性が考えられる。「応募しなかった」学生は、実践型インターンシップ参加者が66.7%で最も多く、次いで体験型インターンシップ参加者が26.8%、鍛え上げインターンシップ参加者が33.3%と同程度であった。実践型は人数が極端に少ないために参考程度にするが、体験型インターンシップや鍛え上げインターンシップについては、大学経由の単位取得型インターンシップであるため、応募しない理由について検証する必要がある。結果を表11に示す。

表11 インターンシップの種類別の内定状況

	参加したインターンシップの種類								合計 人数	%
	個人開拓		体験型		鍛え上げ		実践型			
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
内定をもらった	85	50.3	20	35.1	7	58.3	1	33.3	113	46.9
内定はもらっていない	54	32.0	16	28.1	1	8.3	0	0.0	71	29.5
応募しなかった	29	17.2	21	36.8	4	33.3	2	66.7	56	23.2
その他	1	0.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.4
合計	169	100.0	57	100.0	12	100.0	3	100.0	241	100.0

⑦インターンシップの期間別の内定状況

次に、インターンシップの期間と内定の獲得状況について述べる。

「内定をもらった」学生は、3日間の参加者が最も多く63.2%であった。次いで5日間以上の参加者が52.6%、2日間参加者が45.8%、4日間参加者が45.5%、1日参加者が36.5%であった。1日の参加者以外で内定をもらっている割合が高かったことから、とりあえず複数日開催されるインターンシップに参加することとの関係性が示された。

「内定はもらっていない」学生は、1日の参加者が40.6%で最も多く、他の参加者が20%台であった。1日の参加者以外で内定をもらっていない割合が同程度であったことから、複数日開催されるインターンシップに参加することが内定に近づく一歩であることが示された。

「応募しなかった」学生は、5日間以上の参加者が27.4%、4日間参加者が27.3%であった。どの期間でも合わないと感じた事業所には応募していないことが推察された。期間については、1日以外の参加者は内定獲得に可能性があることが示された。結果を表12に示す。

表12 インターンシップの期間別の内定状況

	インターンシップの日数 (参加者のみ)										合計	%
	1日		2日		3日		4日		5日			
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
内定をもらった	35	36.5	11	45.8	12	63.2	5	45.5	50	52.6	113	46.1
内定はもらっていない	39	40.6	7	29.2	5	26.3	3	27.3	19	20.0	73	29.8
応募しなかった	21	21.9	6	25.0	2	10.5	3	27.3	26	27.4	58	23.7
その他	1	1.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.4
合計	96	100.0	24	100.0	19	100.0	11	100.0	95	100.0	245	100.0

⑧インターンシップ参加と就職活動状況の困難性

就職活動状況の困難性に与えるインターンシップへの参加不参加の影響を分析するために分散分析を行った。回答者全体(表13)のうち、就職活動を経験した者を対象とするために、「進学する」と「その他」は除外し358名を分析対象とした。得点は、「内定を得て就職活動を終了」を5点、「内定を得たが就職活動を継続」を4点、「内定を得ておらず就職活動中」を3点、「内定を得ておらず活動していない」を2点、「これから就職活動をする」を1点として、求めた得点合計の平均値とインターンシップの参加不参加について分散分析を用いて比較した。

表13 インターンシップへの参加不参加と就職状況

	参加した		参加していない		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%
内定を得て就職活動を終了	213	87.3	109	65.7	322	78.5
内定を得たが就職活動を継続	5	2.0	6	3.6	11	2.7
内定を得ておらず就職活動中	9	3.7	13	7.8	22	5.4
内定を得ておらず活動していない	0	0.0	2	1.2	2	0.5
これから就職活動を始め	1	0.4	2	1.2	1	0.2
小計	228	93.4	132	78.6	358	87.3
進学する	12	4.9	27	16.3	39	9.5
その他	4	1.6	9	5.4	13	3.2
合計	244	100.0	168	100.0	410	100.0

その結果、インターンシップに参加していない者の方が参加した者より1%の有意差で就職活動の困難性が高く ($F(1,355) = 10.336, p < .01$)、インターンシップへの参加不参加が就職活動の困難性に与える影響が大きく、参加しない者の方が、参加した者より就職活動の困難性が高いことが示された。結果を図5に示す。

この結果から、インターンシップの参加が10月以降の就職活動のモチベーションや行動にプラスの影響を与えていることが推察された。

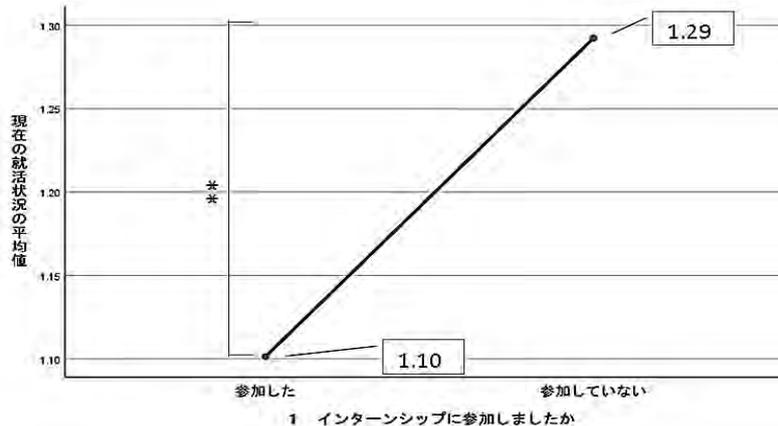


図5 インターンシップ参加不参加と就職活動状況の困難性比較

次に、就職活動状況の困難性に与える所属学部と参加不参加の影響を分析するために、分散分析を行った。その結果、所属学部の主効果が有意であった ($F(4,336) = 4.363, p < .01$)。また、参加不参加の主効果が有意であった ($F(1,336) = 16.497, p < .001$)。Tukey を用いた多重比較によれば、所属学部と参加不参加に交互作用が見られ ($F(4,336) = 2.884, p < .05$)、創造工学部の方が経済学部よりインターンシップ参加が就職活動の困難性に与える影響が大きく、参加していない者の困難性が高いことが示された。

これらの結果から、不参加学生の就職活動状況の困難性が高い傾向が見られた。特に、創造工学部の学生は、参加していない学生の就職活動に対する困難性が高い可能性が示された。本調査協力者のみの結果ではあるが、教育学部には影響が見られなかった。一方で、農学部や創造工学部の学生には、インターンシップの参加不参加による就職活動への影響が大きい可能性があることが示唆された。図6に示す。

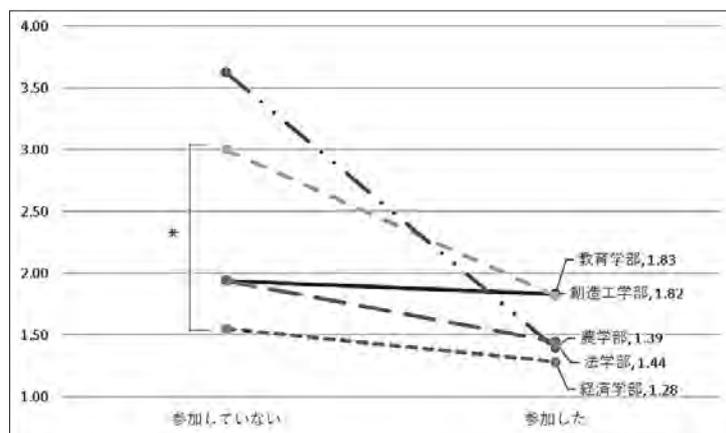


図6 学部ごとのインターンシップ参加不参加と就職活動状況の困難性比較

⑨ インターンシップ参加日数と就職活動状況の困難性

就職状況の困難性に与えるインターンシップへの参加日数の影響を同様な方法で分析した。その結果、5%の有意差で ($F(5,351) = 2.513, p < .05$) で、参加日数が0日の者の方が参加日数1日の者より就職活動の困難な状況が高く、参加日数の項目では有意差は見られなかった ($F(4,223) = .867, n.s.$)。この結果から、日数に関わらずインターンシップに参加した学生の方が、就職活動に対する困難性が低いことが示された。結果を図7に示す。

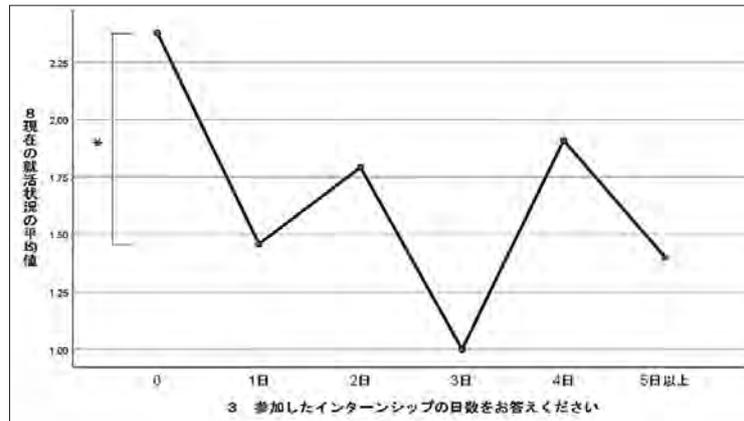


図7 インターンシップ参加日数と就職活動状況の困難性比較

次に、学部ごとに参加日数と就職活動状況の困難性について調べたが、学部間に有意差は見られず ($F(4,320) = .402, n.s.$)、不参加学生の就職活動状況の困難性が高い傾向が見られた。そもそも活動的で意欲的な学生がインターンシップに積極的に参加していると考えられ、どのような内容であれ、その後の活動にはプラスの影響をおよぼすものと考えられる。学生の就職活動をスムーズに進めるためにも、インターンシップに全く参加していない学生への誘導が必要である。

⑩ インターンシップの種別と就職活動状況の困難性

就職状況の困難性に与えるインターンシップの種別の影響を同様な方法で分析した。その結果、有意差は見られなかった ($F(3,220) = .773, n.s.$)。実践型が比較的高いのは、対象人数が少数のためであり、結果に影響はしなかった。この結果から、参加するインターンシップの種類よりも、インターンシップを経験することそのものに、就職活動に対するポジティブな影響があることが推察された。結果を図8に示す。

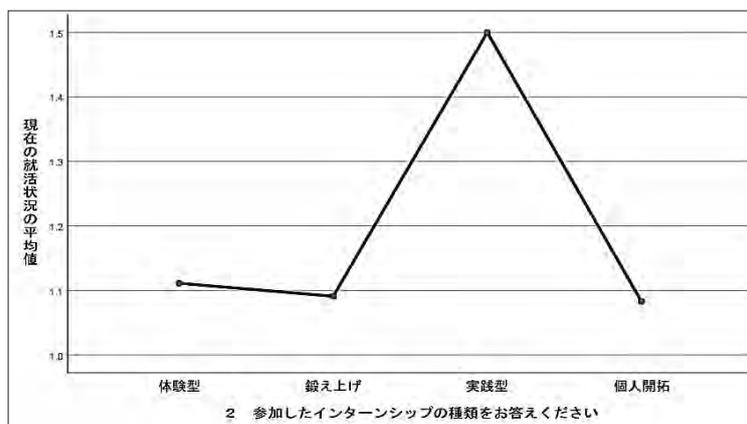


図8 学部ごとインターンシップ参加日数と就職状況と就職活動状況の困難性比較

次に、学部ごとに就職活動状況の困難性に与えるインターンシップの種類の影響について分析した。その結果、学部間に有意差は見られなかった ($F(7,159) = .662, n.s.$)。参加者の学部、インターンシップの種類別人数の偏りがあり、比較は困難であった。もともと活動的で意欲的な学生がインターンシップに積極的に参加していると考えられ、インターンシップの内容がどうあれ、その後の活動にプラスの影響を及ぼすことが考えられる。

⑪インターンシップに期待すること（目的）の記述から

「インターンシップに期待すること（目的）は何でしたか。（複数回答可）」という質問に対する自由記述を、筆者が内容によって分類した。その結果、「社会や業界の研究」が172名、「職場の雰囲気の確認」が152名、「就職活動につながる」が143名、「職業適性の確認」が127名、「個別企業の研究」が119名、「自己理解を深める」が87名、「社会人としてのマナーを身につける」が44名、「売り込み」が各2名、「自己成長」「単取得のため」「スキルアップ」「単位取得のため」が各1名であった。目的を大まかに分けると、個別企業について271名（個別企業研究、雰囲気）、自分のため258名（マナー、自己理解、適性など）、社会や業界172名、就職活動のため143名の順に多く、インターンシップ参加時点において、既に目的の企業を定めている者と、自己理解や適性を確認したいという就職活動の初歩の段階にいる者がいることが推察された。また、体験型や個人開拓型インターンシップには、「社会や業界の研究」「職場の雰囲気の確認」が多く、鍛え上げインターンシップは「職業適性の確認」が多かった。

学生は、近年のインターンシップが就職につながる機会であると認識しており、業界や企業の情報収集や雰囲気の確認などを積極的に行おうとする者がいる一方で、自己の職業適性を確認したり、自己理解を深めたり、社会人としてのマナーを身につけるなど、やや消極的な目的を持つ者もあり、二極化が見られる。個人開拓型の学生は、ターゲットが決まっている者と漠然と参加している者に二分される可能性があることが考えられる。結果を表14に示す。

⑫インターンシップに参加して良かったこと

「インターンシップに参加して良かったことをお書きください。」という質問に対する自由記述を、筆者が内容によって分類した。

その結果、「職場の雰囲気の確認」が80名、「個別企業の研究」が58名、「社会人としてのマナーを身につける」が57名、「個別企業の研究」が41名、「自己理解を深める」が23名が多かった。また、「自分のためになった」33名、「インターンシップの参加特権」19名、「社員との関わり」17名など、インターンシップに参加しなければ得られなかった情報や特権が得られたり、就職活動に直結したりするような記述が見られた。

一方で、参加目的が多かった、「職業適性の確認」「就職活動につながる」の回答数は少なく、企業情報を得られても自分自身との照合にまで至っていないこと、就職活動につながるほどの活動にはならなかったことが分かる。参加目的が多かった体験型の「社会人としてのマナーを身につける」は、事後では0名であり、事前に少なかった個人開拓型に多く見られた。個人開拓型の中には、準備不足のまま参加し、マナー不足を感じる者が多かったと考えられ、事前指導への参加誘導が必要であることが示された。また、参加前に積極的であった個人開拓型の学生に「インターンシップに参加した特権が得られた」と感じている者が多いことが推察された。また、インターンシップに期待すること（目的）と良かったこと（満足）の記述件数を単純に比較してみると、体験型、個人開拓型は満足の記述件数が少なく、鍛え上げ型と実践

表14 インターンシップに期待すること（目的）の記述内容

	人数	社会人としてのマナーを身につける	自己理解を深める	職業適性の確認	社会や業界の研究	個別企業の研究	職場の雰囲気の確認	就職活動につながる	自己成長	スキルアップ	売り込み	単位取得のため	合計	%
体験型	体験型(1日)	9	0	3	5	8	2	5	4	0	0	0	27	12.7
	体験型(2日)	4	0	0	2	4	1	3	1	0	0	0	11	5.2
	体験型(3日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	体験型(4日)	3	0	1	1	0	0	0	2	0	0	0	4	1.9
	体験型(5日～)	41	22	20	24	33	18	27	26	0	0	0	171	80.3
	合計	57	22	24	32	45	21	35	33	0	0	0	213	100
鍛えあげ	鍛えあげ(1日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	鍛えあげ(2日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	鍛えあげ(3日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	鍛えあげ(4日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	鍛えあげ(5日～)	12	3	7	10	7	4	7	7	0	0	0	45	100
	合計	12	3	7	10	7	4	7	7	0	0	0	45	100
実践型	実践型(1日)	2	0	0	0	2	1	0	1	0	0	0	4	80.0
	実践型(2日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	実践型(3日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	実践型(4日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	実践型(5日～)	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	20.0
	合計	3	0	0	0	2	1	1	1	0	0	0	5	100.0
個人開拓型	個人開拓型(1日)	84	9	27	36	55	49	53	48	0	0	0	277	47.3
	個人開拓型(2日)	18	1	4	9	13	9	11	10	0	0	1	58	9.9
	個人開拓型(3日)	18	1	4	9	13	9	11	9	0	0	1	57	9.7
	個人開拓型(4日)	8	0	3	5	7	5	6	6	0	0	0	32	5.5
	個人開拓型(5日～)	39	8	18	26	30	21	28	29	1	1	0	162	27.6
	合計	167	19	56	85	118	93	109	102	1	1	2	586	100
総計	239	44	87	127	172	119	152	143	1	1	2	849		

型は満足の記事件数の方が多くなっていた。結果を表15に示す。

これらのことから、単位取得型インターンシップ参加者の中には消極的参加者がおり、制度に乗ることが目的であり、主体的にインターンシップに関わる準備が出来ていない者が少なからずいる可能性があると考えられる。一方、個人開拓型が積極的かと言うと、そうでもない。事後の「社会人としてのマナーが身につけられた」の記述が57名と多く、「自己理解を深める」「職業適性の確認」が127名であり、キャリア形成の最初の段階にいる者が多いことが考えられる。このように、インターンシップに参加する学生の中には、積極的な者と消極的な者の二極化が見られることが示された。彼らは、自己開拓型のため、キャリア支援センターなどの支援を受けていない可能性があり、インターンシップ後に職業選択や就職活動に対する意識の再構築の機会が必要であろう。ここからも、体験型と個人開拓型の参加者について、インターンシップ事後の効果を上げるための工夫が必要であることがわかる。

表15 インターンシップに参加して良かったことの記述内容分類

	人数	社会人としてのマ	自己理解を深める	職業適性の確認	社会や業界の研究	個別企業の研究	職場の雰囲気の確認	就職活動につながる	自己成長	スキルアップ	売り込み	単位取得のため	社員との関わり	経験になった	志望動機につながった	視野が広がった	意欲向上	働くイメージ醸成	自分のためになった	IS参加特権	その他	合計	%
体験型																							
体験型(1日)	9	0	0	0	1	4	3	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	10	11.1
体験型(2日)	4	0	0	0	1	2	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	5	5.6
体験型(3日)	0	0	0	0	2	6	4	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	15	16.7
体験型(4日)	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	3	3.3
体験型(5日～)	41	0	3	1	3	13	16	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	2	15	0	1	57	63.3
合計	57	0	3	1	7	25	24	0	0	0	0	0	5	4	1	1	1	2	15	0	1	90	100
鍛えあげ																							
鍛えあげ(1日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
鍛えあげ(2日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
鍛えあげ(3日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
鍛えあげ(4日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
鍛えあげ(5日～)	12	0	1	1	2	4	3	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	14	100
合計	12	0	1	1	2	4	3	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	14	100
実践型																							
実践型(1日)	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	66.7
実践型(2日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
実践型(3日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
実践型(4日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
実践型(5日～)	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	33.3
合計	3	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	100
個人開拓型																							
個人開拓型(1日)	84	1	11	2	17	17	18	0	0	0	0	0	5	2	0	1	1	2	7	8	3	95	36.8
個人開拓型(2日)	19	7	0	0	2	4	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	0	27	10.5
個人開拓型(3日)	18	49	0	0	3	1	8	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	4	2	0	68	26.4
個人開拓型(4日)	8	0	1	0	3	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	3.1
個人開拓型(5日～)	40	0	7	1	6	6	13	0	0	0	0	0	6	1	0	1	0	3	6	7	3	60	23.3
合計	169	57	19	3	31	28	53	0	0	0	0	0	12	3	0	2	2	5	18	19	6	258	100
総計	241	57	23	5	41	58	80	0	0	0	0	0	17	8	2	4	3	7	33	19	8	365	

⑬インターンシップに参加して改善してほしかったこと

「インターンシップに参加して改善してほしかったことをお書きください。」という質問に対する自由記述内容を種類と期間別に分類した。さらに、内容をテキストマイニングにて分析した（ユーザーローカルAIテキストマイニングを使用）。

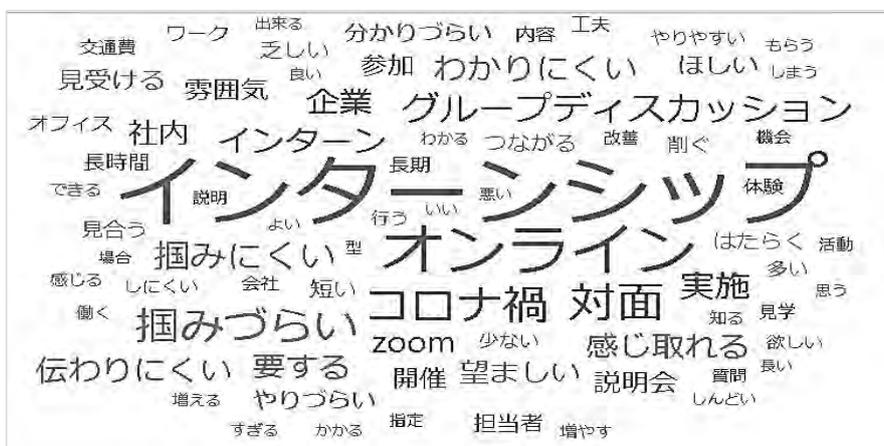
その結果、回答数は、良かったこと365件に比べると少ない202件であった。テキストマイニングによる単語出現頻度は、名詞では、「オンライン」「インターンシップ」「対面」「企業」「雰囲気」「内容」「会社」などが多く、動詞では、「なす」「知る」「感じる」できる」などが多く、形容詞では、「ほしい」「多い」「欲しい」「短い」「少ない」などの単語の出現頻度が高かった。また、出現単語をスコアで図示したところ出現頻度と同様の結果となり、新型コロナウイルス感染拡大の影響の下オンラインでの開催が多くなった結果、企業情報の理解や職場の雰囲気がつかみづらかったと感じていることが示された。参加インターンの種類と期日ごとの自由記述内容を表16に、テキストマイニングの結果を表17、図9に示す。

表16 インターンシップに参加して改善してほしかったことの記述内容

インターンシップの種類	人数	回答	改善点
体験型(1日)	9	3	オンライン状況の改善、質問時間が短すぎる点、学内であれば企業数が増えると嬉しい、特になし6
体験型(2日)	4	1	外国人向けのインターンシップ、特になし3
体験型(4日)	3	2	参加先の会社の人柄、あまりにも当たりが強くなる気が削がれてしまったので、特になし2
体験型(5日～)	41	15	対面での実施にしてほしかった、仕方がないことではあるが、感染対策をしながらなるべく対面で行ってほしかった。仕方がないがオンラインで5日間は正直しんどかった。インターンシップ後の発表の機会が、コロナ禍であるとは言え、少し物足りなく感じた。オンラインインターンシップでは現場の様子を見られなかったので見られるような工夫してもらいたかった、オンラインで実施するならば、時間を短く設定してほしかった。仕方がないとはいえ、感染予防策から営業同行が出来なかったのが残念だった。1日での移動距離が長いうえに移動に設けられた時間も短かったので大変だった。課題の内容が非現実的なシチュエーションになっていることがある。学部指定、より多くの幹旋先があると良いかもしれない、費用が結構かかってしまうこと。体験時間がもう少し欲しかった。その企業の悪い所をより多く伝えて欲しかった。自分が参加した企業のインターンシップの体験記が読みたかった。レポートの分量の多さ。特になし25
合計	57	21	
鍛えあげ(5日～)	12	2	詳細なフィードバックが欲しい、オンラインへの変更等の連絡を前日にもらったこと、特になし9
合計	12	2	
実践型(1日)	2	0	特になし2
実践型(5日～)	1	1	会社を知りすぎた事
合計	3	1	
個人開拓型(1日)	84	121	オンラインではなく対面がよかったです。89、オンラインだったので、それが全てです。オンラインでの長時間のインターンシップは体力的に苦しいため、改善してほしい。対面ではなかったことが残念。そもそも抽選で落選することが多く、参加意思に見合っていないところが多かった。長時間のオンラインでのインターンシップ、オンラインだとラグが生じて活動しにくい場面があった、オンラインだと雰囲気掴みづらい。面接では実際のオフィスに行ったが、実際の雰囲気にちよつとがっかりしたこともある。オンラインだったため、社内の雰囲気はわからなかった。オンライン開催の年だったので、業界のことや企業のことが伝わりにくかった。説明会とほぼ同じというようなインターンも多かったため、ワーク型がもう少しあるといいと思った。オンラインインターンシップはレスポンスが悪い、オンラインだけでは雰囲気を覚えることはあまりできないと思った。特別に用意されたグループディスカッションの活動が主で、会社への理解はあまり深められなかった。実際に職場を見て働いているところを見学したかった。マナー等も詳しく知らない状態で、企業にメールやESを出すのが難しく感じた。会社の説明ばかりではなく、ワークの時間もある程度取り入れてほしい。人間性重視のインターンシップであったため、実際の仕事の様子を見ることはあまりできなかった。インターンシップ担当者や採用担当者等、学生のインターンシップ活動時に常に社内においてほしいと思う。(外回り等で外出をしないでほしいということ。)担当者以外がインターンシップのことを知らず、どうしていいかわからない状態になったことがある。数日だけのインターンシップでは、自分が現場ではたらく想像がつかない。時間が短い、日数が少ない。個人の時間が少ない気がする。基本的に1dayタイプが多く、上辺のみしか知ることはできない。長期のインターンシップが増えてほしい。分野の偏りを少し感じた。過去の活動内容などについては不明。一度きりのインターンでは得られる情報が乏しい。実際に仕事をしてみたい、会社説明会ではなく、実際に働く内容に近い内容を体験出来るものがよかった。一方的な説明だけで終わったため、役に立つ情報をあまり得られなかった。色々、単位認定の方はわかりにくくて諦めました、会社の雰囲気をあまり感じ取れなかった、特になし37
個人開拓型(2日)	19	9	オンラインで行ったので社内の雰囲気が分かりづらかった、長時間のオンライン型インターンシップ、オンラインが主流であった、対面の方がやりやすい、コロナ禍でオンラインでのインターンシップが多く、実際の雰囲気を掴みづらかった。日程が2日と短かった、人事と話す機会が少なかった。作業時間が少なかったこと、1つしか行っていないので比べられない、交通費支給、特になし9
個人開拓型(3日)	18	20	通信状況によって、うまくつながらない企業もいくつかあった。対面・オンラインの柔軟な対応、情勢の影響によってオンライン開催に変更されたものが大半で、その多くが企業説明会と同様の内容だった。参加した一部は審査を要するものがあって、よりインターンシップに参加する意義のある内容があればよかったと思う。(オンラインで実施できる業務体験など)通信環境がよくない。場の雰囲気が掴めない。オンラインではなく対面の実施を、オンラインサイト(zoomなど)をどの企業でも統一して欲しい。終了時間を確定して欲しかった、時間厳守にして欲しい、実際の職場(オフィスや作業現場など)を見学したかった、特になし8
個人開拓型(4日)	8	7	オンライングループワークのやり方、オンラインのグループディスカッションはやりづらかった、交通費や宿泊費がかかった。交通の便が悪い、特になし3
個人開拓型(5日～)	40	21	対面が望ましかった。オンラインの質を高めてほしい、オンラインの対応がまだ不十分だった。回線や、連絡手段など、できれば対面で行ってほしい。企業の雰囲気を知りたいから。オンラインのインターンでは、対面型よりも比較的参加人数が多かったため、一人ひとりが発言したり、質問する機会が少なかった点。特にオンラインの場合は、Zoom以外のコンテンツによる開催はしんどい部分があった。慣れていないと困難な点。オンラインでのインターンシップで会社の雰囲気がわかりにくかったので、社内風景を見せてほしいと感じた。コロナが収まったなら積極的に対面にして欲しい、オンラインの場合、映像による雰囲気はやはり掴みにくい、コロナ禍での開催だったため、座学が多かった。大規模なインターンシップでは質疑応答での質問者が多く、質問することが出来なかった。時間のほとんどを会社説明に費やすのではなく、質問の時間を増やしてほしい、発言できる機会を増やして欲しい、対面で開催できるようにすること。業務内容を理解しきれなかった、社員のひとと個別で話す時間がより欲しかった、長期インターンとなると、なかなか地方(香川)にはなく、同じような経験を香大生が積もうと思うと大変な部分があると感じた。もっと、長期インターンのメリットをしっかりと大学側も認知した上で、地元企業と連携して香川県にいる学生のポテンシャルの最大化をしてほしい。事前にどのような内容のを行うのか簡単なタイムスケジュールで教えて欲しい(参加者同士のグループディスカッションがあるなど)。ワンデーのものは時間だけ指定されているものが見受けられたので気になるところでも躊躇してしまっ。複数回開催されているインターンシップで、毎度同じ資料映像が使われていたこと、時間が長すぎる、本選考につながらなかったこと。特になし17
合計	169	178	
総計	241	202	

表17 インターンシップに参加して改善してほしかったことのテキストマイニング分析結果

品詞	単語	出現回数	品詞	単語	出現回数	品詞	単語	出現回数	品詞	単語	出現回数	品詞	単語	出現回数	品詞	単語	出現回数
名詞	オンライン	18	名詞	仕事	2	名詞	工夫	1	名詞	スケジュール	1	動詞	なす	8	動詞	言う	1
名詞	インターンシップ	12	名詞	香大	1	名詞	躊躇	1	名詞	やり方	1	動詞	知る	5	動詞	行く	1
名詞	対面	7	名詞	過去の活動	1	名詞	困難	1	名詞	不明	1	動詞	感じる	4	動詞	見る	1
名詞	企業	7	名詞	業務内容	1	名詞	分野	1	名詞	改善	1	動詞	できる	4	形容詞	ほしい	10
名詞	雰囲気	7	名詞	作業現場	1	名詞	香川	1	名詞	地方	1	動詞	思う	4	形容詞	多い	9
名詞	内容	7	名詞	コロナ禍	1	名詞	参加者	1	名詞	最大	1	動詞	行う	3	形容詞	欲しい	8
名詞	会社	7	名詞	地元企業	1	名詞	デー	1	名詞	人数	1	動詞	しまう	3	形容詞	短い	4
名詞	参加	6	名詞	時間厳守	1	名詞	風景	1	名詞	日程	1	動詞	すぎる	3	形容詞	少ない	4
名詞	インターン	5	名詞	大学側	1	名詞	座	1	名詞	前日	1	動詞	つながる	2	形容詞	よい	3
名詞	実施	4	名詞	体験記	1	名詞	認定	1	名詞	向け	1	動詞	増やす	2	形容詞	わかりにくい	2
名詞	開催	4	名詞	会社説明会	1	名詞	統一	1	名詞	外出	1	動詞	働く	2	形容詞	長い	2
名詞	質問	4	名詞	企業説明会	1	名詞	シチュエーション	1	名詞	詳細	1	動詞	増える	2	形容詞	悪い	2
名詞	グループディスカッション	3	名詞	質疑応答	1	名詞	個別	1	名詞	特別	1	動詞	かかる	2	形容詞	良い	2
名詞	社内	3	名詞	グループワーク	1	名詞	認知	1	名詞	タイム	1	動詞	もらう	2	形容詞	いい	2
名詞	長期	3	名詞	一人ひとり	1	名詞	宿泊	1	名詞	サイト	1	動詞	出来る	2	形容詞	掴みにくい	1
名詞	体験	3	名詞	質問者	1	名詞	大半	1	名詞	使用	1	動詞	感じられる	1	形容詞	望ましい	1
名詞	説明	3	名詞	幹旋	1	名詞	費用	1	名詞	一部	1	動詞	要する	1	形容詞	やりづらい	1
名詞	機会	3	名詞	作業時間	1	名詞	重視	1	名詞	距離	1	動詞	見受ける	1	形容詞	分かりづらい	1
名詞	zoom	2	名詞	上辺	1	名詞	連携	1	名詞	同士	1	動詞	はたらく	1	形容詞	乏しい	1
名詞	担当者	2	名詞	es	1	名詞	落選	1	名詞	主	1	動詞	見合う	1	形容詞	詳しい	1
名詞	ワーク	2	名詞	香川県	1	名詞	便	1	名詞	課題	1	動詞	削ぐ	1	形容詞	近い	1
名詞	オフィス	2	名詞	不十分	1	名詞	メリット	1	名詞	担当	1	動詞	深める	1	形容詞	うまい	1
名詞	見学	2	名詞	フィードバック	1	名詞	同様	1	名詞	2日	1	動詞	掴める	1	形容詞	難しい	1
名詞	交通費	2	名詞	複数回	1	名詞	意思	1	名詞	生	1	動詞	費やす	1	形容詞	しんどい	1
名詞	指定	2	名詞	学内	1	名詞	いくつか	1	名詞	個人	1	動詞	高める	1	形容詞	強い	1
名詞	多く	2	名詞	情勢	1	名詞	業務	1	名詞	現実	1	動詞	取り入れる	1	形容詞	嬉しい	1
名詞	様子	2	名詞	外回り	1	名詞	マナー	1	名詞	メール	1	動詞	役に立つ	1			
名詞	学生	2	名詞	ay	1	名詞	費	1	名詞	1つ	1	動詞	積む	1			
名詞	変更	2	名詞	分量	1	名詞	外国人	1	名詞	用意	1	動詞	比べる	1			
名詞	型	2	名詞	ld	1	名詞	毎度	1	名詞	経験	1	動詞	きれる	1			
名詞	映像	2	名詞	意義	1	名詞	採用	1	名詞	影響	1	動詞	伝える	1			
名詞	活動	2	名詞	ポテンシャル	1	名詞	質	1	名詞	抽選	1	動詞	慣れる	1			
名詞	発言	2	名詞	柔軟	1	名詞	資料	1	名詞	移動	1	動詞	諦める	1			
名詞	現場	2	名詞	選考	1	名詞	学	1	名詞	やる気	1	動詞	見せる	1			
名詞	状況	2	名詞	偏り	1	名詞	社員	1	名詞	基本	1	動詞	見れる	1			
名詞	部分	2	名詞	大規模	1	名詞	コンテンツ	1	名詞	簡単	1	動詞	話す	1			
名詞	対応	2	名詞	学部	1	名詞	単位	1	名詞	想像	1	動詞	教える	1			
名詞	職場	2	名詞	支給	1	名詞	当たり	1	名詞	設定	1	動詞	しれる	1			
名詞	理解	2	名詞	人間性	1	名詞	ワン	1	名詞	タイプ	1	動詞	つく	1			
名詞	状態	2	名詞	説明会	1	名詞	面接	1	名詞	連絡	1	動詞	読む	1			
名詞	情報	2	名詞	人柄	1	名詞	きり	1	名詞	1日	1	動詞	出す	1			
名詞	場合	2	名詞	交通	1	名詞	通信	1	名詞	上	1	動詞	使う	1			
名詞	大変	2	名詞	審査	1	名詞	事前	1	名詞	とこ	1	動詞	終わる	1			
名詞	以外	2	名詞	人事	1	名詞	レポート	1				動詞	わかる	1			



※スコアの大きさは、与えられた文書の中でその単語がどれだけ特徴的であるかを表す。通常はその単語の出現回数が多いほどスコアが高くなるが、「言う」や「思う」など、どの文書にもよく現れる単語についてはスコアが低めになる。

図9 インターンシップ参加者の改善点のテキストマイニング結果（スコア図示）

V 考察

本学の学生が参加するインターンシップは、大学経由のもの和个人開拓のもの2つに大きく分けられた。しかし、その分類は明確ではなく、全学生の参加申告が得られづらいため大まかな現状把握となっていた。大学経由インターンシップは、体験型、鍛え上げ、実践型、地域などが実施され、単位取得型が多かった。単位と無関係のものは、学部や個人開拓のものなどであり、大学経由単位取得型との割合は半々であることが明らかになった。

令和2年度のインターンシップ参加者の内、キャリア支援センターが把握している件数は401名であった。対象学生数と比較してみても、それ以上の学生が何らかのインターンシップに参加している可能性があると考えられる。一方、受け入れ企業177事業所の内、大学経由は50事業所であり、学生が参加するインターンシップ受け入れ企業の多くが個人開拓型の事業所であったことになる。本学では、大学経由単位取得型のインターンシップ参加者は、何らかの形で事前事後の研修を受けることになっており、参加目的の明確化やその後の学生生活改善へのヒントを得る機会が与えられている。令和2年度のインターンシップ参加者は、個人開拓型インターンシップ参加者が多いことが明らかとなったが、個人開拓型インターンシップ参加者には、事前事後の支援や行われておらず。参加者は大手ナビ会社のホームページなどを参考に独自で参加していると推察される。そのような状況の下では、事前指導や準備が不足したまま参加し、事後のフォローもない可能性が高く、インターンシップの効果が期待できるか否かは疑問である。全体ガイダンスへの誘導にも限界があるとすれば、学部単位で何らかの方策を考える必要がある。

また、2021年10月の全学アンケートの結果から、参加者の二極化が見られた。大学経由、個人開拓型に関わらず、目指す企業と定めている積極的な者と、参加目的すら明確でない者の2タイプが見られた。最近のインターンシップが就職活動に直結する傾向が強い現状を考慮するなら、準備不足のまま参加することのリスクを考えさせる必要がある。

インターンシップ参加と就職活動の困難性の関係から、インターンシップに参加している学生の方が就職活動をスムーズに進む可能性があることが示唆された。特に、創造工学部や農学部といった技術系の学部についてはその傾向が強かった。日数や種類に関わらず、インターンシップというイベントに積極的に参加しようという意識を持っている学生が参加するためでもあろうが、意識の低い職業レディネスの未熟な学生に対する啓蒙や、早い時期からの意識づけも必要である。今後、インターンシップの質的向上と教育的効果を期待するのであれば、事前事後の支援の内容を再検討する必要があるが、現在行われている「鍛えあげインターンシップ」のように、事業所にも学生にも手厚い支援を全ての種類のインターンシップ参加者に実施することは現実的に難しい。しかし、就職活動生の二極化が問題視されている中、インターンシップ段階での二極化については、早い段階で解消に努める必要がある。そのためには、対象学年より前段階における学生の学びに対する姿勢や主体性を習得させることが必要であると考えられる。

大学は、経済産業省の提唱する「社会人基礎力」や各大学が掲げるディプロマポリシーの中に掲げる「基礎的・汎用的能力」など、学校から社会への円滑な移動のために必要な能力を育成することが求められている。その解決手段としてインターンシップの推進が必要と考えられている。「近年の我が国においては、産業構造や就業構造が急速に変化する中で、大学等におけるキャリア教育・職業教育や専門教育を強化していくために、産学協働で人材育成に取り組むことが重要となっており、その中でもインターンシップは効果的な教育手法と考えられている。」(文部科学省, 2017) とあるように、本学においても地域との関係を強化しつつ、質の充実と量の拡大に向けて効果的なインターンシッププログラムの策定に組織で取り組むことが必要である。

VI おわりに

この調査は、本学におけるインターンシップの実施状況の全体を把握することに加えて、インターンシップ参加が就職活動に及ぼす影響の一部を伝えることができた。今後のインターンシップの質の向上と学生の職業レディネスの育成の支援につなげたいと考える。

謝辞

本調査にあたり、インターンシップの諸事情についての情報やデータ提供にご協力いただきました、共創人財養成グループリーダー澤井行広氏、共創人財養成グループ中村優介氏に、心より御礼申し上げます。

参考文献

ディスコ（2021）キャリアス就活2022学生モニターインターンシップ特別調査レポート

マイナビ（2021）2022年卒 大学生インターンシップ・就職活動準備実態調査（12月）

文部科学省（1997）インターンシップの推進に当たっての基本的考え方

https://www.jil.go.jp/jil/kisya/syokuan/970918_01_sy/970918_01_sy_kihon.html

文部科学省（2010）大学設置基準及び短期大学設置基準の改正について（諮問）平成22年1月29日

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1289824.htm

文部科学省（2017）インターンシップの更なる充実に向けて 議論の取りまとめ

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/076/gaiyou/1386864.htm

文部科学省（2021）令和3年版子供・若者白書（全体版）

https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r03honpen/pdf_index.html

文部科学省・厚生労働省・経済産業省（2015）インターンシップの推進に当たっての基本的考え方（平成27年一部改正）

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/12/15/1365292_01.pdf